

第1部 偲ぶ編

総合司会・池田朝子さん

それでは、これより「第1部 偲ぶ編」を開始いたします。第1部では、在りし日の清水さんを偲ぶメッセージを頂きます。司会は、NHK チーフアナウンサーの内多勝康様をお願いいたします。

司会・内多勝康さん（NHK チーフアナウンサー）

皆さま、こんにちは。今、NHK 名古屋放送局でアナウンサーをしております内多勝康と申します。私が東京にいたころ、医療者と患者がどう向き合っていたらいいのか、コミュニケーションをどうとっていったらいいのかということに、清水先生からとても大きな影響を受けました。そして、先生たちの志を実現するために何とかお力になれないかと、いくつか番組を作らせて頂きました。

さて、第1部は「偲ぶ編」ということで、清水先生の業績を称え、別れの悲しみを噛みしめる時間とさせていただきます。おひとり5分くらいをお願いします。

では最初に、武末文男さんをお願いいたします。武末さんは、厚労省から現在、奈良県に出向されております。医療政策部の部長をされており、医療安全の会合などで清水先生との交流を深めてこられた方です。よろしくをお願いします。

武末文男さん（奈良県医療政策部部長）

◆清水先生に言いたくて、言えなかったこと◆

武末でございます。私にとって清水先生の「うそをつかない医療」の取り組み、あるいは「私は、うそをつきました」という告白は、非常に胸にくるものがありました。というのは、そのお話を聞かされたときに、私は非常に恥ずかしい気持ちになるからです。

清水さんは、私にとっては本当に太陽のようにまぶしい人で、その反面、ちょっと真っ直ぐ見られない、というところがあります。というのは、今日までずっと、私もうそをついてきたからです。

いつかその話を清水さんとしていたんだけれども、亡くなられてしまいましたので、今日、皆さんに少しそのお話をし、その気持ちを伝えたいと思います。

それは、私が医師になって初めて看取った患者さんとのことです。食道のがんで、手術後に縫合不全を起こされて、誤嚥がひどく、肺にも転移がみつかってしまいました。呼吸状態も悪かったので、なかなか厳しい状態でした。

その方は「1日でも長く生きたい」とおっしゃられていました。と言いますのも、その方のお子さんが2ヵ月後に結婚式をするから、せめてその時まで生きたいということで、抗がん剤の治療をすることになりました。

治療を始めましたら、1週間で状態が悪くなって呼吸困難になり、意識がなくなってしまいました。そろそろ危ないかなとなった時に、ご家族の方がお子さんとその婚約者の方を呼んで、お父さんにふたりの将来のことを報告するとともに、その方々はクリスチャンでしたので、讃美歌を歌われました。

ご家族から、「讃美歌を歌うので、先生も一緒に来て下さい」と言われたんです。

でも、私は行けなかったんです。手術か検査があるから、と言って行きませんでした。

と申しますのも、何日か前に、たまたまその方のカルテを見た当直の先輩が私を呼びまして、「お前、こんな人になんて治療をやってるんだ」と怒られたんです。誤嚥があって、ある意味、肺炎を起こしているような方に対して抗がん剤治療というのは、強い骨髄抑制作用のある白血球が下がるような治療法でした。ですから、そういう治療を行えば1ヵ月ももたないというのは、火を見るよりも明らかだったんです。

私は、医者になったばかりで右も左も分からなくて、当時の指導医にその話をしました。ただ、本当にタイミングの悪いことに、その指導医も何日か前に代わったばかりで、どういう経緯でその治療が行われているのかが、よく分からなかった。分からないままにその方は亡くなりました。遺族の方は何も怒らず、ご遺体を故郷にお連れになったのです。

そのことを、家族にお話をするべきかどうか、当時、私はいろんな人に相談しました。亡くなった後もいろんな方にお話をしたんですけれども、誰もその答えを教えてくれないし、答えてくれませんでした。

なかには私を慰めてくれるためか、「そういうことはよくある話だよ」と言われたこともありました。でも、本当に、本当にですね、人の命を救いたいと思って医者になったばかりの私にとって、そんなことがよくある話なのか、と思って余計にショックだったんです。

◆忘れられない讃美歌◆

そのことがあってからもう 20 年近く経っているんですけども、その患者さんのお名前と年齢と、実は住所もまだ覚えています。訪ねて行って、お話がしたいと何度も思いました。でも、行けないまま、今日に至っています。

今日までずっとそうをつき続けていた私にとっては、「うそをつかない医療」というのは本当にうらやましい。本当にそういう医療ができるなんて……、できるといいな、というふうに思います。

その時にご家族が病室で歌った讃美歌というのもよく覚えております。結婚式とかお葬式の時によく歌われる讃美歌です。このことをまるで、ご存じのように、ゆきさんから今日、話をせよと言われてまして、その讃美歌の歌詞を調べてみました。

すると、ひよっとすると、ご家族たちは私が話したかったことを、もう知っておられたのかな、と思うぐらい、その讃美歌の歌詞が合っていることが分かりました。だからこそ「先生、来て下さいね」と言っておられたのかな、と思います。

最後にその讃美歌を、清水さんとご家族の方、その方に贈って、私の話を終わりにしたいと思います。讃美歌の第 312 番です。

いつくしみ深き 友なるイエスは
罪とが憂いを 消し去りたもう
心の嘆きを 包まず述べて
などかは下ろさぬ 負える重荷を

どうもありがとうございます。

司会・内多勝康さん

ありがとうございました。武末文男さんでした。過去の体験を初めて告白して下さいました。武末さんは日本の医療を変えるために救急医療の現場から霞ヶ関に飛び込んだ、という方です。これからはぜひ、ご活躍下さい。では続きまして、朝日新聞の記者、上野創さん、高橋美佐子さんご夫妻にお願いいたします。清水院長が新たにスタートさせました医療安全活動の紹介記事を初めて書いた記者でもいらっしゃいます。ことに上野記者は、清水院長ががんの告知を受けられてから精神的な支えにもなった方です。では、おふたり、よろしくお願ひします。

上野創さん（朝日新聞記者）

◆「患者中心の医療」への関心が出会いのきっかけ◆

みなさん、こんにちは。今日こうして写真を見ると、改めて、いるべき人の不在というものの重さをすごく感じます。

私は朝日新聞で記者をしているんですけども、同時に 26 歳の時にがんで患いまして、その体験を手記にしました。清水さんはそれを非常に深く読んで下さいました。当時、だんだん患者中心の医療、患者本位の医療ということが言われ始めるようになり、私も興味を持ちました。実は私は医療担当を 1 度もやったことがなく、どちらかというと社会部とか教育の世界の担当でしたが、ご縁があって清水先生とお会いしました。

出会いは、「医療過誤の被害者である豊田郁子さんをなぜ病院に招くのか、そんな医者は他にはいない」ということに驚いて取材に行ったことでした。その時にいろいろ話をして、私のがんの話も出まして、それですごく意気投合して、長いおつきあいが始まりました。

ある時、清水先生が「病院の中に闘病記も含めて患者さんが知りたいと思った時に調べられる、患者図書館のようなスペースを作りたい。上野さん、ちょっとアドバイスをほしい。そして、できればいろんな人に知らせてほしい」とおっしゃるので、それを記事にしたことがあります。

できたばかりの本棚のある一角を先生と豊田さんが嬉しそうに、私に見せてくれました。「いろんな患者さんの要望を聞いて、これをまた大きなものにしていきたい」とおっしゃっていました。今でこそ図書室のある病院もけっこう多いですけども、あの頃はとても先駆的で、そうした不採算部門をきちんと整備していく姿勢にすごく感銘を受け、尊敬の念を持ちました。

◆がんになって、患者と医者との壁から解放された◆

清水先生ががんになられてからは、がん患者同士のおつきあいになりました。先生はいつも、どこかふざけた

感じの喋り方をなさるのですよね。がんになっても、深刻に「上野さん、実は僕、大変なことになった」と言っ
て下を向いたり、ということは1度もありませんでした。

むしろ、「がんになってよかったよ。よかったことがいっぱいあるんだ」とおっしゃっていたんです。例えば、
「僕、最近、もうあまり心臓の治療に興味が無くなっちゃってね」と言い出したことがありました。「じゃあ、ど
んな治療に興味があるんですか」と聞いたら、地域をまわって回診する、往診ですね。「その先の看取りも含めて、
やっぱりそこが本当に今、すごく面白いんだ」と。

で、「相手ががんで苦しいとか辛い、不安だと言う時に、『僕もがん患者ですよ』という、もう一気に患者と
医者という壁が崩れて、患者同士の触れ合いになるんだよ。こんなこと今までなかった」と、おっしゃっていた
んです。

清水さんが豊田さんを隣に置いたのは、「監視させるためだ」と言われました。「僕だって人間で、いつもそ
をつきたくなるし、いつも間違いを犯しがちなので、隣に見ててくれる人がいないと困る」と。

自分が患者という立場になった時に、改めてその大変さや不安、それから実はがんよりも抗がん剤の副作用が大
変なんだ、ということが分かったそうです。それから合併症、彼の場合は腸閉塞でしたけれども、「もうあんな
苦しいことはなかったのに、医者は全然分かっちゃいない」とおっしゃっていました。それをまた発信することで、
病院やお医者さんに対してメッセージをずっと投げかけていた。

◆残された者の使命—清水先生の不在を埋める—◆

思えば、清水先生が治したかったのは日本の医療なんだと思うんです。患者に軸足を置きながら。日本の医療
はもっともっとよくなれる。そのためには自分がしょっぱいことも酸っぱいことも辛いことも言うんだ、という
気概ですね。排除したければしてみる、という気概をもって、「ぼくが言っていることは正しいから、それが日
本の医療のためなんだ」と、おっしゃっていました。記者に対しても「じゃんじゃん書け」と。

「もっと腹決めて、しっかり書け」と、私もだいぶハッパかけられました。実際、その精神というのはあちこ
ちにあるんだろうと、今、強く思っています。

「いるべき人の不在」、そこを埋めていくのはやっぱり自分たちの、残された者の使命なんだろうと思います。
また、この笑顔ですね。それでいつもふざけて面白いことを言ってくれた先生からもらったものを大事にしたい
と思っています。そして、私にとっても家族は支えでしたので、家族の立場、それから清水先生のファンとして、
最後まで一緒に清水先生とつきあった妻にかかります。

高橋美佐子さん（朝日新聞記者）

◆記者の思惑を超えた清水先生と患者さんの関わり◆

朝日新聞東京本社生活グループの記者をしております高橋美佐子と申します。私のような人間がこのようなど
ころで発言させて頂けるのは、本当に不遜な感じがしています。ですけれども、最後に本当にお世話になったお
礼を込めて、先生のことを少しお話しさせて下さい。

朝日新聞で今年、『孤族の国』という連載をしまして、今年の元旦の新聞に私が書かせて頂いた記事が載っ
ております。中高年の独身男性が母親の介護をしているという話です。そこで取材した中年男性は、実は清水先
生に紹介して頂きました。

下町の雑貨屋さんで、息子さん60代後半、お母さん90代半ばのふたり暮らし。商品の棚にほとんど物がな
いような雑貨屋さんで、清水先生がナースの方たちと一緒に回っておられました。

『孤族の国』というのは、いかに人間が孤独になっていくのかという話、単体として浮遊しているみたいな、
さみしい姿をイメージしていて、清水先生だったらそういう人を簡単に紹介してくださるんじゃないかという、
自分の中ではずいぶんと気持ちがありました。

先生はすぐに「いいよ」と言って、自分の大事な患者さんを紹介して下さいました。私は悲惨であればあるほ
ど記事になりやすいという、すごく不純な動機で伺ったんですけれども、その方取材して記事になるまでの間
に、清水先生が医療としてやろうとしていたことが少し見えたような気がしました。

そして、ダメな男の人たちを描く、というようなことにはなりません。清水先生のことを「いやあ、い
い先生だね。本当に先生がいるから、うちの婆ちゃん生きていけるんだよ」と話されて、見事だな、と思いました。

清水先生は「僕の方が先に死んじゃうかもしれないから、おばあちゃん、がんばってね」というような会話を
何気なくさりげなくされていて、なんなんだろうな、この人は、と思いました。

◆清水先生を清水先生たらしめたもの◆

武末さんがおっしゃったように、満面の笑みで、裏表がなさすぎて、本当、先生の前に出ると、何か悪いとこ

◆医療事故、そして夫の死◆

転院してから亡くなるまでに半年ほどありました。その途中のある日曜日の早朝、病院から電話がかかってきました。「ご主人の容体が急変したから、できたらお子さんも連れて来て下さい」ということでしたので、子どもたちにも連絡をとって、病院に駆けつけました。

病院に到着すると、夫のところに行くより前に、病院の先生から院長先生、看護婦長さんと、主治医の先生と、いろいろおいで下さって、どうしてこのような状態になってしまったのかということ、よく説明して下さいました。

つまり、食道に挿入する管が間違えて気管の方に入ってしまったと。それで肺炎を起こしちゃったんですね。それで意識の低下を招いて、今は集中治療室にいるということ、まあ、先生は正直におっしゃって下さいました。一通り説明して下さいした後、「こういうことですから補償もさせていただきます」ということでした。私は本当に、とても残念で心配でしたけれども、大変な、重篤な状態の主人を引き受けて下さって、本当に親切に面倒を見て下さり、看護師さんも本当によく働いていらっしゃることをよく見てきましたので、私の方で「それはちょっと」ということで、夫のところに行きました。

確かに意識は落ちておりましたし、話をしても聞こえてはいたと思いますけれども、夫の方から返事はなかったですね。おそらく返事をするほどの体力がなかったんだと思います。

その後、集中治療室を出て、個室に移ることができました。夫は透析も受けておりました。普通は透析室に患者が向くと思いますが、清水先生は個室で受けられるように機械も用意して下さいたり、夫の世話でいろいろな看護師さんや他の面倒をみる方が、よく個室を訪れて下さっていました。

夫は肺炎を起こしたことで体力の低下を招いて、結局は腸の手術もしないまま、亡くなってしまったんです。新葛飾病院に移ってから半年後くらいで、最終的には胃からの出血ということで亡くなりました。

◆夫がいい病院に入院できてよかった◆

本当に亡くなってしまったことは残念です。ですけれども、大学病院で30年来おつきあいで、ずっと心配して下さい先生が本当に信頼して、「清水くんだったら、おそらく考えて下さるんじゃないか」と見込んでですね、紹介して下さいと思うんです。

初めて清水先生のもとに伺ったときに、「正直言って、引き受けたくない」と本当に明るい笑顔で言われて、私は「さあ、どうしようかなあ」と、少し途方に暮れた思いもいたしました。そして、「他にどの病院で面倒をみて頂けたらどうか」と思います。とても家では面倒をみきれない状態ではありませんでしたから。

昨年12月に清水先生のお母さまが亡くなられて、「今年はこのように、年末年始のご挨拶は遠慮いたします」というご挨拶状を頂きました。その後、清水先生と電話でお話しをする機会に恵まれ、いろいろ話をしていうちに、先生は「一度、僕は木更津に行ってみたいんだよ。状態がよくなったら行ってみたいんだよ」とおっしゃいました。私は「どうぞおいで下さい。ご案内いたします」と申し上げたのですが、結局、先生が亡くなっちゃったんですね。

木更津においで頂くこともよかったですけれども、清水先生の方へ私からお訪ねして、ちょっとお目にかかってお話でもできたら本当によかったのにと、今でもそれは本当に悔やんでいます。

「こうしたい」「本当はこうすればいいんじゃないか」って思った時がチャンスなんですね。清水先生はおそらく、ご自分のお父さまやなんかのこともずっと思い、また豊田さんの息子さんのこと、いろいろな方のお話も聞いて、それを実践された方ですね。考えるだけだったらできます。行動に移すってことは並大抵のことではありません。

私は今でも、本当にいい病院に夫が入院できて、面倒をみて頂いて、清水先生ともお話しができて、本当によかったと思っています。幸せだったと思っています。ありがたいと思っています。本当にこんな席に私が出るようなものでもありませんが、この機会を与えて下さって、とりとめもない話でしたが、本当にありがたく思いました。

司会・内多勝康さん

ありがとうございます。三輪美子さんでした。清水先生への感謝の気持ち、伝わったと思います。

続きまして、医師の岩岡秀明さんをお願いいたします。岩岡さんは医療事故裁判での鑑定医として、清水院長とともに被害者救済活動に取り組んでこられました。新葛飾病院で起きた医療事故を考えるシンポジウムにも参加されています。では、よろしく申し上げます。

岩岡秀明さん（船橋市立医療センター代謝内科部長）

◆論理的で臨床的裏付けのある意見書や鑑定書で、病院側有名教授に全戦全勝◆

ご紹介ありがとうございました。船橋市立医療センターの内科医の岩岡と申します。清水先生と知り合ったのは1999年ごろでした。医療事故裁判をやっている原告の方のホームページを偶然、インターネットで見、その方を支援するメールを出して、初めて医療事故裁判では鑑定が大事だということが分かりました。それで、藤田康幸弁護士が主宰されている「医療改善ネットワーク」という市民団体に参加しまして、その過程で清水先生と知り合いました。当時、医療事故裁判で患者側から依頼されて鑑定書や意見書を書き、裁判にも出ていた医師は、ごくわずかしかなかったと思います。

循環器内科の専門医として日本で最初に心臓のカテーテル治療をやり、臨床家としてトップレベルの清水先生がそういうことをされている。それを見て、私は「すごいなぁ」と本当に思いました。何度もご一緒させて頂いて、いろいろアドバイスを受けてたりして、やはり臨床家としてもものすごくできる方で、それから患者さんの視点に立って常に正しいことを、きちっと鑑定書を書いていらっしゃることに感銘を受けました。

一般の方は「当り前のこと」とに思われるかもしれませんが、けれど、たとえばそれが有名な大学病院だったり、大きな国立病院だと、「病院側には過失がなかった」、または「亡くなった原因が不詳 (unknown) だった」という意見書が、有名な教授などから出てくる。それと闘うというのはものすごく大変なことです。それをずっとそばで見させて頂いて、とても自分はそんなふうにはなれないと思いながらも、いくつか私も自分の専門の糖尿病とか内分泌の分野で意見書を書いて、何回か裁判にも出ました。

清水先生がすごいのは、そういう裁判で何回でも意見書を書くんですね。意見書や鑑定書というのは、専門家同士の合法的な闘いのようなものなのですが、1回書いて相手が反論すると、論理的できちっと臨床的に裏付けられたことから何度も書かれる。そして、いろんな有名な大学の循環器内科とか心臓外科の教授たちときちんと闘って、清水先生が鑑定書を書かれた裁判ではすべて患者側が勝訴しているとお聞きしていました。

◆病床から患者さんの治療について相談の電話が◆

特殊な不整脈が起きて亡くなったようなすごく難しい裁判で、「これ、内分泌の方からも書いてほしいんだよ」と私に依頼されたのですが、本当に申し訳ないと思いながらも、自分の実力、自分の知識でははっきりと書けないためにお断りしたことがあって、本当に申し訳ないなと思っています。

仕事以外では、清水先生とは一緒に食事もして、とても楽しい方でした。いつも笑いながらですけども、「岩岡、うちの葛飾病院に來い。うちに來たら、そんなしょっちゅうメールとかできるような時間はない。もっと厳しくしごくから來い」と何度も言って下さったんです。ありがたいと思いつつ、私には清水先生についていくほどの度胸もなく、それもお断りしてしまって申し訳なかったことです。

今日のプログラムにも書かれています。学生時代から母校の東京医大と闘ってきて、卒業された後は三里塚を支援されたとかアフリカに行かれたとか、本当に生えぬきというか、基本的な生き方が違う、まったく私のおよびもつかない先生で、そばで拝見して、尊敬する先生でした。

ご病気になってから、会えば「なんで酒もたばこもやらない俺がこんながんになって、岩岡のように酒をいっぱい飲んでいる奴がなんないんだ。不公平じゃないか」なんておっしゃっていました。

亡くなるちょっと前の5月頃、私の病院に突然、電話がかかってきました。ご自分の病院に入院されている患者さんが突然、尿崩(にょうほう)症という、ものすごく尿が出る病気になって、いろいろ検査したけれども診断に主治医が苦勞しているから、それについて教えてくれないかと。ご自分も「抗がん剤はつらいよ」と言っているにもかかわらず、すごく患者さんのことを思ってもらって、電話で長くお話をしました。実はその時が最後になってしまったんですが、とにかく日本の医療を良くしていくことについて話されていました。

◆清水先生の思いと活動を引き継いでいきたい◆

清水先生がすごいのは、葛飾病院に豊田さんを迎えられ、医療安全のために稲葉先生たちと一緒に患者さんと医療者を結ぶ「ADR 架け橋」という試みを始められて、それが少しずつ進んできていることです。裁判では限界があるということをご自分できちんと30年間やってこられたうえ認識されてやっているの、正直な話、法律家や行政などがやろうとしているようなADR (Alternative Dispute Resolution: 裁判外紛争解決) とはちょっと違う、やっぱりすごいなと思っています。

それから、今日はいろんな方と再会できました。一時期、清水先生と一緒に協力させて頂いた季刊誌「患者のための医療」を出していた篠原出版新社の井澤さんもその1人です。2002年当時はまだ患者のための医療ということは全然進まなくて、十数号出して休刊してしまいましたが、本当に今日、皆さまと一緒に、常に医療をよくしようという清水先生の活動を受け継いでいきたいと思っています。

話が前後しますが、その2002年に私は現在の船橋市立医療センターに移りました。当時、船橋市立医療センターでは大きな内視鏡的胃瘻(いろう)造設術(PEG)による事故で患者さんが亡くなって、刑事裁判中でした。

遺族の方と病院がすごく大変な時に、私が赴任しました。院内の事故調査委員会も病院の関係者だけでやっていたので、私は「そんなじゃダメだ」と一生懸命、主張して、弁護士の藤田康幸先生とか読売新聞記者の鈴木郭秋さんなど外部委員にも入ってもらって、医療事故調査委員会をやり直しました。そして、きちんとした調査委員会報告書を出して頂いて、ご遺族の方にもきちんと謝罪して、和解して示談になりました。

清水先生の新葛飾病院での取り組みを船橋市立医療センターで実践させて頂いたわけです。今は医療事故調査委員会に外部委員が入るといことはごく普通になっていますが、当時はすごく大変でした。ですから、そういう点でも清水先生は先進的な方でした。これからも本当に清水先生の思いを引き継いで、微力ながら協力できたらと思っています。今日は、どうもありがとうございました。清水先生、どうもありがとうございました。

司会・内多勝康さん

ありがとうございました。医療事故の被害者救済活動に清水先生と一緒に取り組んでこられました、医師の岩岡秀明さんでした。

では、続いて、川添明子さんをお願いいたします。川添さんは1999年にご主人を医療事故で亡くされました。その後、医療事故訴訟を起こしまして、その時、清水先生が協力医として関わっていらっしゃいます。では、よろしくをお願いします。

川添明子さん（医療の良心を守る市民の会）

◆鑑定医として出廷した医療裁判では攻撃的に◆

こういうところでお話しするのは本当にダメなんです。清水先生にはお世話になりました。とても、とてもお世話になりました。泣くかもしれませんから、書いてきたものを読みます。

先生には、夫の医療裁判で大変お世話になりました。裁判など初めてで、裁判所ってすごく神聖なものだと思っておりましたが、いつのまにか夫のことから話がそれて、鑑定して下さった清水先生に対する攻撃に変わっていったのには驚きました。

私たちのために鑑定して下さった先生が攻撃されるのがつらくて、申し訳なくて、もうどうしようかと思いました。でも、弁護士さんが「清水先生は何を言われても平気ですから、気にしないで下さい。（相手には）言いたいだけ言わせて、勝手にさせて下さい」と、余裕で言われました。

何を言われても平気なはずはありませんが、先生はご自分への攻撃もご承知の上で、間違いを見過ごせず、鑑定を引き受けて下さったのだと思います。人として、悪いことを悪いと間違いを正すことは、なかなかできることではありません。

いろいろありましたが、先生のご尽力により、裁判では私たちの訴えがすべて認められ、平成15年に和解いたしました。夫の死因もはっきりし、ほっとしたのですが、真相究明に夢中だった日々が止まり、夫のいない悲しみに毎日、沈んでおりました。先生はとてもやさしい方で、永井さんと豊田さんをご紹介下さいました。永井さんと豊田さんはご自分たちの悲しみを乗り越えて、よりよい医療をと本当に奮闘して、その献身的な姿に私も目が覚める思いでした。

◆先生は私たちのこれから見守って下さる◆

豊田さんと永井さんの活動は皆さんも十分、ご承知だと思いますが、ご家族の死を無駄にせず医療を良くしようという活動は、患者や医者という立場を越えて、清水先生と通じていると思います。私もこれから微力ながら何かできることを探してお手伝いしなければ、永井さんにも申し訳ないと思っています。

私は運よく、た清水先生のための院内ミニライブにもご一緒させて頂いて、先生とお話をする事ができました。その日は私の誕生日でもありました。誕生日に、お世話になった先生とお話することができたことが最後で、とても印象に残っております。

「うそをつかない医療」を実践し、真っ直ぐと生き抜かれた先生に対して、ご恩を決して忘れることはないし、同じ葛飾に住んでいて、先生がずっと頑張っていたらした病院の前を通るたび、忘れることはありません。

病院へ行っても院長がいないことはとても寂しいのですが、主人を亡くした時に思いました。本当はあの世とこの世は境があるのではなくて、私たちは続いているんだと。ですから、私たちのこれから見守って下さると信じております。本当にありがとうございました。

裁判所で先生が毅然とした態度で証言して下さった様子は、本当に素敵でした。皆さまにもその姿を見てほしかったな、などと思いますが、本当にありがとうございました。ご冥福を祈っております。

司会・内多勝康さん

ありがとうございました。川添明子さんでした。川添さんは現在、「医療の良心を守る市民の会」など市民活動にも参加されています。それで突然なんですけれども、今、お名前が出ました「医療の良心を守る市民の会」の永井さんにも一言、頂けると嬉しいんですが、永井さん、いかがでしょうか。カメラ撮影でお忙しいと思いますが、一言、清水先生へのお言葉をお願いいたします。

永井裕之さん（医療の良心を守る市民の会代表 / 国際医療福祉大学大学院生

◆「安全文化」の実現には、正直文化の成立が不可欠◆

ただいまご紹介頂きました永井です。今日は、僕は裏方に徹するはずだったのに……。「医療の良心を守る市民の会」は清水先生が副代表でおられるということで、先生のアドバイスを頂きながら、5年続けてきております。

「うそをつかない医療」。先ほど武末さんがおっしゃったように、病院長でそれを言っている人は全国でまだ、3人しかいないと、僕はずっと言い続けてきました。その1人が亡くなったので、今日、来て頂いた内野直樹先生に「次に先生、お願いしますよ」とお願いしました。そういう院長を増やしていく運動をやりたいと思います。

メディアの方がそういう先生を発掘して、紹介して頂くのが一番早いと思っていますので、今日のこの機会を通じて、そういうよい先生方を発掘して頂きたい。我々としても各自、そういう先生を発掘したり、よい医療とか、うそをつかない医療、うそをつかない文化、正直文化が成立しない限り、安全文化にまで発展しないと私は言い続けています。正直文化をぜひ多くしていきたいなと思っていますので、ぜひ皆さまのご協力を得ながら、「医療の良心を守る市民の会」も続けていきたいと思っています。

今日は、本当にありがとうございます。

司会・内多勝康さん

突然、指名いたしました、すみません。どうもありがとうございました。

それでは、ここからは新葛飾病院の職員の方の声を頂きたいと思っています。まずは山中鈴美さんをお願いいたします。看護師であり、社会福祉士でもいらっしゃいます、患者支援室でお仕事をされています。

清水先生とは前の病院から18年のおつきあいということで、患者支援活動を積極的に行っている院長を長年、見てきた方でいらっしゃいます。

山中鈴美さん（新葛飾病院 患者支援室）

◆若き日の清水先生の姿をおすそ分け◆

皆さん、こんにちは。私は新葛飾病院の患者支援室で相談員をやっております、山中鈴美と申します。医療コーディネーターという仕事を平成3年からやっておりまして、清水先生とは平成5年からのおつきあいになります。

私は以前に勤めていた千葉県松戸市の新東京病院で、平成7年に患者さんの会を作りました。今もずっとそのボランティアを続けているんですが、その設立総会に清水先生にお越しいただきました。

皆さんに若い時の先生を少しでもご紹介したいと思っています。清水先生は循環器内科医として活躍されていました。その頃、血液を固まりにくくするワーファリンを飲んでいていた患者さんにペースメーカーを移植するのに、出血を抑えるようワーファリンを止めるか止めないかで意見が分かれました。当時の外科医は止めることを選んだのですが、やはり患者さんが脳梗塞を起こしてしまいました。その時に清水先生は患者さんにきちんとお話し下さり、患者さんもすごくよくお分かり頂いた記憶があります。

（スクリーンに写真が映写される。）



これは新東京病院のホームページからも見るのですが、これは、20人くらいで分担して初めてやった患者さんの会の写真です。ここにいらっしゃるのが清水先生です。

次、ここにいるのが順天堂大学の胸部外科の教授になっている天野篤先生です。私はずっとこの事務局を先生方と患者さまと作って、永井さんのように裏方の仕事をずっと務めてきました。

次ですが、当時一緒に仕事をしていた心臓外科医がこの須磨久善先生という先生ですが、小説やドラマのチーム・バチスタで知られるバチスタ手術で、当時は胃の大網動脈を使う心臓の手術を得意にしていた先生です。清水先生が検査して手術適応となると、

の先輩として私たち新葛飾病院のスタッフの大切な院長先生でした。今も先生はどこか遠く、高いところで見て下さっているのかなと思っています。先生、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

大切なお時間を頂きまして、ありがとうございました。

司会・内多勝康さん

ありがとうございました。新葛飾病院の医療コーディネーターの山中鈴美さんでした。

では、次が最後になってしまいますが、小野田俊之さん、お願いいたします。新葛飾病院で先月まで事務長をしてらっしゃいました。「うそをつかない医療」を清水先生とともに実践してきた方です。院長の謝罪の場にも同席し、正直な対応を行ってきた方です。では、よろしくお願いいたします。

小野田俊之さん（新葛飾病院事務長）

◆社会問題や社会正義への関心と情熱は誰よりも強かった◆

小野田と申します。お時間頂きまして、ありがとうございます。ご紹介頂きました通り、私は院長と事務長という立場で7年半、清水先生とおつきあいをさせて頂きました。

一番印象にあるのは、私は仕事柄、医師という立場という職種の方とおつきあいは多いんですけども、清水先生ほど世の中のいろんなことに興味を持っている人は、初めてでした。

講演される時によく、足尾銅山の田中正造さんのことだとか、秩父事件の田代栄助さんのことを引き合いに出されます。そういった社会問題に非常に興味を持たれていて、新聞も多く読まれていて、世の中の権力に対峙し、強きを挫き弱きを助ける、社会正義というものに非常に心を燃やしていた方だな、という印象を持っております。水俣にも再三、出かけておられたというお話も聞いております。

病床のころに、私も病室でそんな話をいろいろさせて頂きました。5月でしたか、菅内閣の不信任決議が取り沙汰されている頃に、一言、「総選挙になったら、また500億円かかる。それを三陸に送ってあげればいいのになあ」とポロっと言ったり、本当に広く社会に目を向けられている医師に、本当に僕は初めてお会いしたという気持ちです。

◆事務長から見た清水院長の困ったところ◆

皆さんが清水先生の非常にいいところをたくさん話して下さいだったので、私は事務長として困ったことをいくつか、最後に披露させて頂ければと思います。

ご案内の通り、非常に患者さん側に立った目線で、ということで、いろいろな対応をされていたのはもちろん事実です。そして医療安全対策室に豊田さんを迎えて、いろんなことに対応されてきました。

ただ、私もいろんな場面で清水先生や豊田さんと一緒に患者さんの心を開こうとして話をしている時に、突然、医者に戻っちゃうことがたまにあるんですね。どういうことかと言いますと、患者さんが過敏に反応したり、あるいは患者さんがこちらの話を悪くとして非常にエスカレートしたりした場合、清水先生は医者に戻って、話が決裂しそうになることがたまにありました。

私は医者じゃないですから、患者さんの弱い者の気持ちが非常によく分かるところがある。患者さんはそう言うけれども、今は仕方ないんじゃないのかな、と思うような時に、清水先生ももちろん分かって下さるんですけども、たまには「医者」になっちゃうことがある。豊田さんもそういった場面に何回か立ち合われています。だから、清水先生もスーパーマンじゃない、やはり人間味があるんだということをちょっとお知らせしておきたい、と思います。

それから、病院の中ではある意味ワンマン、という言葉が合っているかどうか分かりませんが、何か問題があっても自分が率先して現場に行ってしまうですね。そして、患者さんと話したり家族と話したり、対応した職員を呼んで、「どうなってんだ!」「じゃあ、俺がこれをやってこれを話しくから。後はこうやっておけよ!」というような。イニシアチブはもちろん素晴らしいんですけども、ピンポイントで指示を出されるもので病院全体としての横のつながりがなかなかとれなかったな、という反省がちょっとあります。

非常に指導力があり、いろんな対応を率先してさせて頂きました。ただ、やはり組織的に病院を動かすというところに関しては、ちょっと事務長として苦労したなというところがあります。

◆介護の世界でも「うそをつかない」文化を広めたい◆

そうは言っても皆さんお話し頂いたように、これだけ患者さんの気持ちや立場に立って、いろいろな活動をして頂いたということは、これはもう紛れもない事実であります。私も敬服しておりますし、一緒にできたことを誇りに思っております。

私も今回、老人保健施設に異動になりまして、今度は医療よりも介護の仕事が主になります。ぜひ清水先生の気持ちを引き継いで、この「うそをつかない」という文化を、介護の中でも広めていきたいなと思っております。それが清水先生にお世話になった私の、せめてものお礼というふうに考えております。これからも清水先生の言葉を思い出しながら、やっていきたいと思っております。

お時間頂きまして、ありがとうございました。

司会・内多勝康さん

ありがとうございました。新葛飾病院の元事務長、小野田俊之さんでした。

清水先生は亡くなりましたが、たくさんの人の記憶の中に強く生きているな、この笑顔とともに生きているな、という思いを強くいたしました。私も改めて、清水先生が作ってくれた大きな流れに導いて頂いたんだという気持ちを強くしております。この場をお借りして、お礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

では、「第1部 偲ぶ編」、これで終了です。

(清水陽一さんの魂を通じて出会った方々で、えにしむすびたい・む)

総合司会・池田朝子さん

内多さん、進行をありがとうございました。多くの皆さまから清水陽一さんを偲び、讃えるさまざまな思い出のメッセージを頂きまして、誠にありがとうございました。これで第1部を終了いたします。これより15分間、「えにしむすびたい・む」といたします。

皆さん、ご自分の名刺と、「えにし結び名簿」がお手元にありますでしょうか。清水陽一さんの魂を通じて出会った方々同士で、えにしを存分にお広げください。

テレビ朝日「モーニング」より、番組ビデオ「シリーズ地域医療の崩壊と再生 第4弾」上映

総合司会・池田朝子さん

それでは、ここで、番組内に登場された所太郎さんからメッセージを頂きます。所太郎さん、どうぞよろしく願います。

所太郎さん（テレビ朝日モーニングバード！リポーター）

◆鑑定医として出廷した医療裁判では攻撃的に◆

こんにちは。所でございます。映像を久しぶりに拝見しまして、喋るということを稼業にはしているんですが、言葉が出ませんね、これはね。院長とおつきあいが深かったり、ご親交が厚かったり、いろんなところで接してらっしゃった方々を前に、こうやって壇上に上がらせて頂いて申し上げるのもなんですが、私にとって清水院長というのは、非常に雰囲気のある方で、あの独特の雰囲気がものすごく「いいなあ」という感じの方でした。

お話を1時間伺っていても、当たり前のことを当たり前におっしゃいます。これは喋りを生業としている人間からいたしますと、実はものすごいことです。どこかではったりや誇張のある人の方が、お話を伺っていて「ああ、なるほどな」と思いがちになるんですが、当たり前のことを自然体で淡々と、「これは当たり前なんです」とおっしゃられると、「この人にはかなわないな」という思いになります。

それで、清水院長というのは、私にとりましては「この人にはかなわないな」というのと同時に、「この人とお目にかかるのは嬉しいな」「この人とお話できるのは嬉しいな」と思わせて下さった方です。本当はもっと何度も何度もいろんなお話をさせて頂きながら、いろんなことをお教え頂きたかったな、という思いだけが今、残っております。

ただ、これまで皆さん方のお話を伺い、また改めてあの映像を拝見しまして、やっぱり院長はもちろんすごい方ではあるんですけど、人の心というものをずーっと見つめて、見つめようとなさってきた方なんじゃないかと、改めて思いました。

人は心で生きている、とよく申します。私も不勉強ながら、ここ何年、やっぱり人は心で生きているんだなと思うようになりました。人を殺めたり傷つけたりするということは、あってはならないことですし、決して許されることではありませんが、それと同じかそれ以上に、人の心を殺めたり、人の心を折ってしまうということは罪深いかもしいかなと、最近、いろんな場面で思うようになりました。

だからこそ、院長は人として、そして医療者として、人の心をずーっと見つめ続けようとなさったのではないかと

など。だから、あのような言葉が出てきたり、あのような行動が出てきたのではないかな、というふうに思います。たくさんいろいろな思い出や記憶を残して下さった院長ですが、当たり前のことをまっとうにできるように、私もまた気持ちを改めまして精進したいと思いました。

本日は諸先輩たくさんいらっしゃる中、こうやって高い所に上げて頂きまして、ありがとうございました。きっと、私は一生涯、清水院長という自分の知り合いが、こういう人生、こういう考え方を送っていた人があるんだというのを、どこかで語り続けていくことになると思いますが、先ほどお嬢さまには無理矢理、その許可を頂きました。

院長、僕はずっとあなたのことを語り続けていきたいと思っています。ありがとうございました。

第2部 未来編

総合司会・池田朝子さん

所さん、心のこもったメッセージをありがとうございました。

これより「第2部 未来編」を開始いたします。ここからは、「清水陽一さんの思いを未来に生かすために、うそをつかない医療を広げ、深める」パネルディスカッションに移ります。司会は、ゆきさんをお願い申し上げます。

大熊由紀子さん

◆清水さんが医学生時代からのえにし◆

東京医大から鈴木弁護士がたった今、駆けつけて、お座りになったところでございます。「えにしの会」のオキテを破って私が司会をさせて頂くには訳があります。たぶん、私はここで最高齢ではないかと思われそうですが、まだ医学生だった清水さんが私を講演に呼んで下さったらしくて、40年以上という、お嬢様より長いおつきあいになります。

今日はたくさん駆けつけて下さった方の中から、未来に生かすお話をして下さりそうな方をお願いをして、ここに並んで頂いております。そして、皆さんに7分ずつくらいお話を頂きます。

私が司会をする時には1つの約束事がありまして、先生とか、課長とか、局長とか、そういうふうに言うと平等感がなくなりますので、幼稚園時代くらいの呼び名で呼ばせて頂くことにしております。この会場で介護保険のシンポジウムをしたときも、国会議員も局長も、全部「ちゃん」で呼ばせていただきましたので、今日もそのようにさせて頂こうと思います。

では、1番バッター、立花榮之(しげゆき)さん、本当は日本ホールディングというところの代表取締役であられるようなのですが、でも、「しげちゃん」と呼ばせて頂きます。

それではしげちゃん、よろしく願いいたします。

立花榮之さん(新葛飾病院患者遺族)

◆人生最期の選択肢を奪われ、無念の死を迎えた父◆

ご紹介を受けました、立花でございます。私は新葛飾病院患者遺族として参りました。私の尊敬する清水先生にはただならぬえにしがございまして、本日の偲ぶ会に家族ともども馳せ参じたわけでございます。話が2つございまして、清水先生の運動のきっかけとなったエピソードと、それから大きな中心核を無くしたこの運動は一体、どこに行っちゃうんだろうということを心配しまして、この2つのテーマに沿って話させていただきます。

今、圧倒的な映像を見ましたけれども、本当にすごいですね。所さん、本当にご苦労さまでした。ぜひこれを語り草にするんじゃなくて、この運動を支えるマスコミの一員として、ぜひぜひこれからも末長く見守って頂きたいと思っていますので、どうぞよろしく願います。

はじめに、先生との関わりですが、9年前に私の敬愛する父が新葛飾病院で他界しました。外科手術の成功により完治したものと思っておりましたら、胃がんが全身に転移しまして、悲惨な最期を遂げたのでございます。

医療ミスの隠蔽があり、その事実を私も家族もまったく知らされず、抗がん剤を許可なく投与されていました。本当に、日に日に悪化していきました。再入院した時は、主治医から「今すぐどうってことないよ」と言われました。その言葉にすがりつくような思いでございましたけれども、ところが、あまりにもこのような容体が悪化したこ

とに不信感を持ちまして、強く問いいただきました。

そうすると、もうすでに手遅れで、あと数カ月の命と宣告されたわけであります。看護師さんからも内部告発がありまして、隠蔽の事実を知り、本当に家族一同は非常に怒りを覚えました。人生の終末をどう過ごすか、過ごさせてあげるかという選択肢もないまま、無念の最期を遂げた親父のことを思いますと怒りが爆発しまして、清水先生の院長室に乗り込んだ次第でございます。

◆父の死を無駄にたくないという思いが、院長の真心ある言葉で報われた◆

当然、先生からは強い抵抗を予想しておりましたし、対峙する覚悟を持って、私たちは法的手段も整えながら乗り込んだわけでございます。そうすると、清水先生は私たちと真正面に向き合いながら、「本当に申し訳なかった」と、最初の一言がございました。

事実関係に基づきまして、記録等を列記して確認しましたところ、全面的に病院側の瑕疵(かし)を認められまして、どのような要求にも「誠意をもってお受けします」と、我々の前に深々と頭を下げ続けられました。

その瞬間、病院の経営を担う立場の院長ではなくて、人間・清水さんの本質を感じた次第でございます。そこで、張り詰めていた私たちの気持ちが一気に緩んだ、緊張が緩んだ、ということをお話しております。

その場は父の死を無駄にさせたくない、という気持ちから、「まずやるべきことは仏前に手を合わせることでしか、我々は何も認められません」ということをお話しまして、数日経って、清水先生は担当医、師長ともどもご訪問頂きまして、仏前で涙を流しながら、「このようなことは当病院では一切させません。私たちはこれに向き合って努力をする」と、悲壮な決意を述べられました。

このような真心ある言葉を仏前で述べられますと、私たちの気持ちも、本当にですね、もうこれでいいんだと、親父の命はこのような形で報われればいいんだ、という思いで、「水に流します」ということをお話をいたしました。そうすると、清水先生は「大変大きな、重い十字架を背負いました」と、真剣に取り組む決意と覚悟を私たちに述べられました。

◆医療事故遺族の豊田郁子さんを病院に迎え、新たな医療文化を創る一步を踏み出した◆

それからしばらくしてからのことですが、先ほど映像にありましたように、連日報道で大騒ぎになっておりました、痛ましい医療事故でお子さまを亡くされた、訴訟中の豊田郁子さんを病院に招き入れまして、患者支援のための医療安全対策室をたちあげました、という報告がございました。ぜひ会ってほしい、ということで、また訪問されました。

私たちは、その大胆な発想とその行動力に、ただただ驚かされました。本当に、本気で一直線に取り組む姿勢というものを感しました。反面、強大な権力組織である医師会を敵にまわすことも案じられまして、またあまりにも弱々しい豊田さんの印象がありましたので、心配でなりませんでした。

しかし、医療従事者と患者という不文律の古い垣根を取り払った、共通の意識と共同作業で病気に立ち向かおうとする大きな取り組み、新たな医療文化創造の第一歩を、これで力強く歩み出したんだな、ということを確認しました。

その後、清水先生からお誘いがありまして、院内のシンポジウムに参加させて頂いたり、院内の医療改革が順調に進む過程を確認させて頂きました。

それだけには留まらず、マスコミの協力を得ながら、草の根を伸ばすように、豊田さんとともに各地に講演活動をし、この運動を全国的に展開していかれました。私にとって、もはや清水先生には尊敬の気持ち以外なものもなくなった、大きな変貌を遂げた瞬間でもございました。

◆世論形成のためにマスコミの役割は大きい◆

その後、私が仕事で大阪に行っていたものですから、先生とお話する機会がなかなかなかったのですが、ちょうど1年くらい前に訪ねた折、清水先生の口から「実は医者の不養生で大腸がんにかかりました。手術をしました」と、思いもよらぬ事実を知らされました。

先生はその時も非常に柔和な顔で平然と、「これで初めて患者さんの立場、目線に立っての医療の在り方が習得できたような気がします。この経験を末期患者さんのホスピスケアに生かしたい」と、目を輝かせながらおっしゃっていました。

私は、いまだかつて、自分の命を賭してまで理想の医療に専念する医師や人物に巡り合ったことはございません。その強靱な医療に対する信念に、私は神の域にまで達したな、という感じがした次第でございます。

その後、ご病気が回復されることを心から祈念しておりましたが、「厳しくなった」という連絡がありました。お見舞いに駆けつけてみると、ご家族の皆さんに見守られながら、意識朦朧の中、目を見開き、ふりしぼるような小さな声で、「ありがとう」とお礼を私たちに言ってくれました。

それから数日して、先生は還らぬ人になったわけでございます。私の父も天国できっと、両手を差しのべて、先生を温かく迎え入れてくれるものと思っております。

先生の肉体は存在しなくとも、その医療改革の志は、このような多くの仲間、支援者の中に生きております。どうか皆さん、どのような困難が待ち構えていようとも、世の中に理解され始めた「うそをつかない医療文化」の運動を広めながら、清水先生の供養としようではありませんか。

最後に、ここにおられる支援者の皆さま、ともに汗をかき、運動を繰り広げながら、新たな医療文化という習慣を根づかせていかなければなりません。そのためには、マスコミ関係者の果たすべき役割は大変、大きいと思います。これからも粘り強く取り上げて頂き、社会の根源である大切な命のために世論形成して行って頂きたいと思っております。

具体的な方策といたしましては、一定規模の病院内では、豊田さんの事例のように患者支援対策室の設置を義務付けること、法令化を含め、政治を巻き込みながら関係省庁に働きかけていく努力も大変必要だと思っております。

清水先生はあの世から事の顛末(てんまつ)を観察し、困った時には必ずアドバイスしてくれるはずでございます。どうか皆さん、よろしく申し上げます。そして先生、本当にありがとうございました。

大熊由紀子さん

ありがとうございました。昨日、お電話した時は、「もう清水さんのようなお医者さんは出てきっこない、もう日本の医者はだめなのばかりだ」とおっしゃっていたんですけど、私がこの会場にいらっしゃるような方の例をいろいろ挙げましたら、ちょっとその矛先が鈍ったようで、希望を少し持たれたようでございます。

今、何度も名前が出ている豊田郁子さん、涙を拭ってらっしゃるので話せないと思いますが、ちょっと立つだけ立って下さいますか。はい。じゃあ、泣いちゃうと思いますので、顔を皆さまにお見せするだけにいたします。

それでは、法律家の稲葉かずちゃんにとねがいます。新葛飾病院内で清水先生主導で行われた研修会を中心になって進めてこられました。これは詳細な記録があるそうで、その中から清水先生の言葉を抜き出しながら話して下さるといことです。よろしく願いいたします。

稲葉一人さん(中京大学教授)

◆清水院長の言葉を振り返る一院内研修会の発言記録から◆

稲葉でございます。今日は2006年頃から約30回にわたって新葛飾病院でやっております研修会についてお話しします。この研修会は豊田さんと今日もいらっしゃる高山詩穂さん(自治医科大学看護学部)と私が企画したもので、新葛飾病院のドクター、ナース、事務系の方、さらには院外の方にもご参加頂く、日本でも非常に稀な研修会です。

全ての回に清水さんが出席している訳ではありませんが、その記録が全部残っております。その中から、院長の非常に特徴的な言葉を少し皆さんにお伝えして、そこから私たちがどういうことを担っていかなきゃならないのかを、少し考えたいと思います。

たとえば第1回の研修会テーマは「責任とは何か」で、2時間くらいかけて30~40人で話をしました。他には「謝罪とは何なのか」「困った患者、困った医療者」について、「困った上司」がテーマの時には院長も出席されました。

「謝罪」がテーマだった時、院長はこうおっしゃいました。「ミスがなければ、病院としては謝らない。しかしミスがあったら、すべての証拠、カルテを全部用意して、詳細に示して説明をして、謝るんだ」と。

この言葉には大きな意味があると思います。院長の「謝る」ということの倫理的な意味が少し見えるんじゃないかな、というふうに思います。

「困った上司、困った部下」の時には、院長はこんなことをおっしゃっていました。「病院は普通の企業とは違う。病院で働いているという意識をきみたちは持っているのか。この地域にどういう医療が必要かを理解しているのか。高齢者の多い地域なのに、年齢を聞いただけで嫌がる医療者がたくさんいるじゃないか。医療を締め付けているのは国、病院を締め付けているはグループ。その中で自分の役割をどういうふうにして考えるのか」。こういう発言がありました。

2007年6月の研修会です。主治医ではない研修医が執刀医となった場合、トラブルになることがよくあります。清水さんに、どう考えますかと、僕が発した問いに対する答えです。

「それは難しい問題だ。研修医の初めての手術は、誰だって受けたくない。その時にどう説明をするのか。『研修医にやってもらいます。全責任は自分が負います』と指導医が言うべきなんじゃないか。自分たちとしては正直

に言うしかない。研修医がやる時は最初に言ったほうがいい。外科手術はチームでやるので、責任者を決めてその人が責任を負うべき。誰がやったか、というようなことを詮索される前に、まずそれを言うんだ」と、おっしゃっています。こういうことがすぐにポンと言える人って、なかなかいないような気がしますね。

2007年の9月です。「患者家族の要望に医療者はどこまで答えられるのか」がテーマでした。院長は、「人は40歳を過ぎると変わらない」と言っています。これを聞くと僕たちはショックを受けるんですけども。「医師は歳をとると傲慢になってくる。それを防ごうという努力を私たちはしている。研修医の人にはいろんな意見を聞いて、いろんな新聞を読んで、単に技術だけではなくて、人間的に成長してほしい。患者さんは1人1人みんな違う。本当に腹の立つこともある。でも、自分はプロなんだ、という思いを持っている」と、こうおっしゃいました。

◆医療者だけで病院は成り立たない◆

さあ、もう少しきます。2007年の12月です。テーマは「リスクの高い患者さんに、どういう説明の工夫をしているのか」でした。その時の院長、「ああ、これは難しい。自分はこれまで心臓カテーテルの治療で、数人の方を自分の手で亡くしている。自分の中ではその人たちのことを今でも背負っている。カテーテルの治療の説明をするときに、そういう事例もあるということ、そのまま話す。『今はいろんな機材が発達していて、何千例としているが、死亡例はない。けれども、しかしあなたがそういう事態にならないと、自分には言えない』と。患者は自分には起こらないだろうと思っていると思うが、事実をそのまま話すようにしている。終わった後はみんなほっとしている。ものすごく心配しているのは分かる。医師の中には『大丈夫ですよ』と言っている人もいるけれども、脳梗塞を起こす可能性はあると思っている。絶対防げない。確率は予測できない。ほとんど起こらないけど……」ということがあります。

次はちょっと観点が違うんですが、医療者は忙しいというけれども、医師が病院の仕事をどこまで理解しているのか、という議論になった時の清水院長の発言です。

「皆さんが知らないことを全部、総務課がやってくれている。要するに、土俵をつくっているようなもの。私たちが働けるのは土俵があるからだ。医者が働いても、医事課がレセプトを起こして請求をしなければ、私たちの給料は出ない。病院とはそういうふう動いている。けれども医師は自分たちの仕事に手一杯で、他の人が何をしているのかあまり知らないだろうと思う」と。これはまさに病院の全体を見た医療をする、という面が表れていると思います。

まだまだたくさん言っておられますので、ぜひこれは何らかの形で僕の方でまとめてみたいなあと思っております。

◆豊田さんのような院内相談員を育てていく◆

いつぞやですね、新葛飾病院が所属するイムスグループの研修会を新葛飾病院が担当するというので、僕も院長からお呼び頂いて、行きました。院長が皆さんの前で僕の紹介をしている時に、事前に僕が出していた経歴書を読んで、「いやあ、稲葉さん、こんな経歴だなんて知らなかった」とおっしゃいました。僕が裁判官だったことは知っていたんだろうと思いますけど、「後は自分で紹介して」と言われたんですね。

ということは、この人は僕の経歴によって呼んだのではなくて、むしろ僕という人間をある程度、信頼して呼んでくれたんだなと思いました。実はその時はすごい礼儀知らずの人かな、と思ったんです。だけどそれを裏返して見れば、人をポジションだけで見てないということなんじゃないかな、ということをしごく思いました。

私の主治医は、実は院長だったです。病院で1度、診て頂いたことがあります。左背部が痛くなって、エコーをかけて頂いて、その後、生活情報をもとにして診断していくとき、お腹を触って「ここは痛くないか」と言いながらやってくれた。そして、「稲葉さん、病院はね、医師はこうやって除外診断をしていくんだよ」ということを、1つ1つ説明してくれました。

ですから、私に医療とは何なのかということを教えてくれたのは、清水さんなんじゃないかなと思います。僕は法律家ですので、それまでは医療の現場で何かをすることはありませんでした。しかし、この機会を与えて頂いたことによって、医療者の間に入って僕が司会をしながらいろんなことを考える、というようなことができるようになったのは、まさに清水さんが与えてくれたものだったんじゃないかな、と思います。

亡くなる数日前に、永井さんの後に続いて私も院長にお会いしました。その頃はもう声をかけることもできないような状態でした。しかし、その時も含めて、今日も含めて、私たちは絶対にこれを続けていく。つまり、私たちが今やっているような病院内の研修ではなくて、それこそ豊田さんのような院内の相談員を育てていくということをやっております。これを私は清水さんの前で、ずっと続けていくということをお約束したいと思います。どうもありがとうございました。

大熊由紀子さん

◆清水先生が手がけた患者支援相談員の養成◆

ありがとうございました。今、お話の出た院内相談員というのを初めて聞かれる方もいらっしゃると思いますけれども、お配りしたピンクの資料の後ろ側を見て頂きたいと思います。「①傷ついた気持ちに寄り添う、②一緒に考える、③マニュアル的スキルに終わってはならない、④謝罪の代行はしない。患者・家族、医療者自身が自分たちで向き合えるように支え、環境の整備をする、⑤公平性・中立性を超える、⑥医療事故分析の調査と連携する、⑦小さな信頼が積み重なって大きな信頼に結びつくようなプロセスを支える」とあります。そして、『患者とのパートナーシップを大切にする文化』を医療現場に根づかせたいと『架け橋』の継続的な活動を望んでおられた清水副代表の遺志を継ぐ活動をこれからも展開してまいります」とに書いてあります。

この「架け橋～患者・家族との信頼関係をつなぐ対話研究会」の、清水さんは副代表でいらっしゃいました。清水さんは不思議な方で、副代表はするけれど、代表にはならない方です。

それでは、この追悼集のトップに出てくる方に話して頂きます。不思議な題がついておりまして、『清水さんからもらった干物と言葉』。

『渡したいものがあるから、病院に来てよ』って言われて、何か遺言とかそういうものかしら、と思って行ったら、『もう僕は長くないからね。院長室を整理してたら、出てきたのよ。君、金にならん仕事してるだろ。たまには家族においしいものを食べさせてあげてよ』と、干物と一緒にカタログギフトの商品券も渡された」という、やはりさすがジャーナリストという文章が載っております。

この、お金にならない仕事ばかりしてる「とりさん」、こと、鳥集さんをお願いいたします。

鳥集徹さん（ジャーナリスト）

◆ジャーナリストたちへの言葉。「たじろぐな」◆

鳥集と言います。週刊朝日とか週刊文春とか、たまに記事を書かせて頂いております。清水さんが思ってたほど、そんな貧乏じゃないんですけど（笑い）、そうとう貧乏だと思われていたみたいです。最初に電話をもらった時には本当、びっくりして、何か重要な書類でも渡されたらどうしようかな、と思ったら、干物だったんでびっくりしたんですけど。すごくおいしかったですね。意外に高級な干物で。

清水さんと僕は、すごく深いつきあいをしていた訳ではないんです。けれども「医療の良心を守る会」とか、打ち上げだとかで飲みに行ったら、なぜか知らないけど、大体、清水さんは僕をからかいの対象にして、「おまえは社会のばい菌だ！」みたいなことをよく言われてですね。

でも、ここにも書きましたけど、そういうからかいの言葉というのが、ああなんか僕のことをよく思ってくれているんだな、というか、何か親密に感じてくれてるんだな、というのがすごく伝わるようなものでした。だから、そういう冗談を言えると思ってくれてたっていうのは、すごく嬉しいことだな、と思っていました。

もう去年の末のころのことだと思うんですけど、医療者とかマスコミ関係者とか患者さんの会の方だとかが集まる会で清水さんがお話されるというので、僕も行きました。ご自身のがんの話や生い立ち、大学病院で医療事故を告発したこととか、医療事故の患者側に立って意見書を書く仕事をしてきたこと、権威・権力に対して堂々とものを言う話をされた清水さんに、「僕らジャーナリストに対して言いたいことはないですか」と聞きました。僕は正直言って、清水さんは長くないだろうなと思っていたので、ここにいるジャーナリストたちに言葉を残してやってくれ、と思ったんです。

そしたら、「たじろぐな、と言いたい」というふうにおっしゃった。

ここ数年、医療者側から社会に対するアピールがすごかったと思います。医療崩壊キャンペーンがあり、医療事故被害者に対して、もちろん理不尽なクレームをつける人たちもいたんだと思いますけれども、挙句の果てにはここにいる勝村久司さんとか弁護士の鈴木利廣さんとか、そういう人たちに対して、「医療テロリスト」というような言葉がネット上で投げかけられたりした。

僕はそれを記事や本で書いて「おかしいじゃないか」ってやったら、僕も相当、いろいろ叩かれました。そういう状況の中で、メディアの多くの人たちは、心理的に相当たじろいでいたと思います。

◆闘ってきた清水さんだからこそ◆

清水さんも医療界の中で闘ってきて、僕ら以上に実は、医療者の仲間から叩かれてきたんじゃないかと思えます。だって、うそをつくな、なんていうようなことを正々堂々と行って、そんなことを言われて困る方々も結構たくさんいたはずですよ、医療者の中には。

そういう所で闘ってきたからこそ、僕らに対して「おまえらもたじろぐなよ」というふうに言いたかったんだと、僕は思いました。本当にその通りだと思うので、僕もいつまでこういう仕事で飯食っていけるか分からないですけど、やっていく限りは、たじろぎそうになるんですけど、清水さんがそう言ってたな、と思いながらやりたいな、と思っています。

もちろん、僕らの仕事、ジャーリズムというのは、権威や権力を監視するというか、清水さんもそうだったと思うんですけども、やっぱり弱い人、患者、例えばおじいちゃんやおばあちゃん、もう物がなかなか言えないような方に耳を傾けることだろうと。

僕らからすると、弁護士さんとか医者を取材するって実は楽なんですよ。すごく論理的で、話した言葉をすぐに文章に書ける。だけど、市井の人たちの言葉を文章にするっていうのはとっても難しいです。でも僕らはそういうところを掘り起こしていかないといけないと思います。

◆志の高い医療者はどんどん応援したい◆

それから一方で、医療者を批判するばかりでなく、この会場にも志の高い医療者の方がいっぱいいらっしゃると思いますけど、そういう人たちをどんどん応援する仕事もしたいと思っています。

僕が危惧しているのは、清水さんのような医療者がこれから出てくるんだろうか、ということです。僕が知っている志が高い、患者側に立っているいろいろな発言して下さるような方は年配の方が多くなっている。大学紛争だとか大学闘争だとか、そういう時代を知っている、反権力の空気を知っている人たちがまだいたから、医療界に対して物を言う医療者がいたんだと思うんですけども、今はそういう環境がなかなかない。

これから、例えば医療事故調なんかが実現していくかもしれませんけれども、患者側の気持ちを分かって、患者側の立場に立って、時には医療界全体にたてつくようなことを言えるような医師が若い人から出てくるんだろうかと。そこを一番心配していて、そういう人たちがいたら、僕らも応援するというか、支えていく、そういうような仕事をしていけたらいいなと思います。

自分自身がどこまで仕事をできているか分かりませんが、自戒を込めて、今日は清水さんの前で誓うというか、話させて頂きたいと思いました。ありがとうございました。

大熊由紀子さん

ありがとうございました。それでは、とりさんが希望を持てるお医者さんに、次、話して頂こうと思います。鳥集さんも徹さんですが、そちらは「とりちゃん」と呼ばせて頂いて、もう1人、本田徹さんをお願いしたいと思います。清水さんの知られざる一面について追悼集に書いて下さっていますけれども、それとは違うことを話したい、とおっしゃっています。どうぞよろしく。

本田徹さん（NGO シェア代表理事 / 浅草病院医師）

◆ 21 世紀における市民社会組織（CSO）の役割 ◆

本田と申します。このような機会を与えて頂いて本当にありがたいというか、清水さんへの感謝も含めて、思いを述べさせていただきます。私は、新葛飾病院の隣の堀切町病院というところで11～12年、院長をやっていた関係で、飲み会も含めて彼といろいろお話し合いをする機会がありました。

先ほど新葛飾病院の小野田事務長さんがおっしゃっていたように、非常に知的な関心領域が広い方で、医学以外のことも非常によく勉強されていた方だな、と思っていました。

私が細々と続けてきた、途上国に対する保健医療支援みたいな NGO 活動に対しても、非常に共感を持って下さっていました。

このセッションで私は、ゆきさんがおっしゃっていた「清水陽一さんの思いを未来に生かす」という視点から、3つのことを申し上げます。1つは、今、いわゆるグローバルな社会になっていて、非常に大きな課題が生まれています。例えば地球温暖化の問題だとか、平和構築などいろいろあるんですけども、そういう大変難しい問題に対して解決が迫られています。解決のためには政府組織というものも非常に大事なんですけども、もう1つ最近言われている言葉に、「市民社会組織（CSO: Civil Society Organization）」という言葉があります。NGO とか NPO もある意味では CSO の1つなんですけども、清水さんが本当に自分の命と引き換えにやってこられたことは、この21世紀のCSOの役割に深くつながっていると思います。

例えば、我々の組織は途上国のHIV/エイズ患者さんに対する支援をやっています。患者さんが先進国だとエイズに対する治療薬は簡単に手に入るけれども、途上国だとそのお薬を手に入れることが非常に難しい。治療に対するアクセスに大きな不平等が生じているわけです。

こういう抗ウイルス薬に対するアクセスを改善するというのが、グローバルの非常に大きな課題でした。これを解決するためにCSOが果たした役割というのが非常に大きかったですね。それから、皆さんご存じのようにクラスター爆弾の禁止条約だとか対人地雷の禁止条約が締結できたのも、CSOの働きが大きかったということは間違いなく言えることです。

でもよく考えてみると、医療安全だとか医療被害にあった患者さんに対する支援というものは、目立たないかもしれないけれども、非常に大きな世界共通の問題ですよ。そういうものに対して、清水さんは医療者でありながら、というか医療者であるがゆえに、当事者運動を育てる、市民主体の運動に積極的に関わっていき、人を育てるということも非常に温かい視点でやってこられた。そういうことに清水さんが託したメッセージを、やはり我々は受け継いでいかなきゃいけないということを感じています。

◆地域の中へ、人々の元へ◆

それから2点目は1点目ともつながるんですけども、21世紀のプライマリーヘルスケアということをおもひつねに考えています。私自身が恩師として慕ってきた人に、日本の農村地域の地域医療を確立したと言われていて、信州の佐久総合病院の若月俊一という院長がいらっしゃいます。この若月さんと清水さんの人間性に多くの共通点を感じております。

それは何かと言いますと、医者は、看護師もそうですけど、「病院の中に閉じこもってばかりいてはだめだよ」ということを若月さんは常に言っていました。「地域の中に出かけていきなさい。そして人々の暮らしがどうなっているのかよく調べなければ、医療ってちゃんとできないよ」ということを常々、おっしゃっていたんですね。

清水さんも病院の中に待ち構えていて、ただふんぞり返って医療をしていけばいいというふうには絶対に思っていないからなくて、どんなにたくさんの患者さんが苦しんでいるかとか、あるいは医療事故の被害にあたりしているか、ということも含めて、非常に大きな想像力とか問題意識を持っていらした。そして、自ら市民活動の中に飛び込んでいくという視点というのは、やはり「新しい公共」というんでしょうか、そういうものを自分たちで担っていくんだ、という問題意識があったんだと思います。

プライマリーヘルスケアというのは、もともと途上国の医療を改善するために1978年にWHO(世界保健機関)が主導して、世界140カ国くらいの代表が集まってつくった「アルマ・アタ宣言」に基づいています。この宣言は、基本的な人権としての医療・保健、住民参加と自己決定というようなことを原則としています。それから、医療以外のいろいろな分野、教育だとか農業だとか、そういう分野との協力や協調を非常に重視しておりました。こういうプライマリーヘルスケアの原則というのは、21世紀の超高齢化社会の中で、いよいよ必要になってきている理念なのではないかな、と私は思っています。

そして今、大震災にあい、原発事故があり、日本の社会の持続可能性が大きな危機に瀕している時に、やはり清水さんが掲げてきたような考え方を重視して、これから受け継いでやっていかなければいけないことを考えています。

若月さんが好きだった言葉に、ロシア語の「ヴ・ナロード(в народ)」という言葉があります。「人々の中へ」とか「go to the people」ということですね。この「ヴ・ナロード」という考え方を若月さんはおっしゃって、農村の中で実践されてきたんですけども、清水さんはまさに都市型の先端的な医療の現場で「ヴ・ナロード」を実践し、体現してきたんだというふうに、改めて思っております。

大熊由紀子さん

ありがとうございます。最後の「医療人の倫理」につきましては、国際医療福祉大学大学院の「現場に学ぶ医療福祉倫理」のゲスト講師として清水先生をお迎えしました。様々な医療職が書いたレポートはまるでファンレターのようなものでした。そのレポートをお手許の追悼集に載せています。先生の遺志はこうして受け継がれつつあります。ただ、お医者さんの世界ではどうだろうと一抹、心配もありますけれども。

ところで、お役所で清水さんのような方と一緒に行動するのは本当は一番難しいことです。上司に目をつけられず、医師会に睨まれず、病院協会に察知されずに、この運動を広げていくという仕事を密かにやってこられた、やすちゃんにお願いしたいと思います。

佐原康之さん(厚生労働省 医政局研究開発振興課長)

◆硬軟織り交ぜて攻め込まれながら、学んだこと◆

佐原と言います。今日はこの場にお招き頂きまして、ありがとうございます。別に密かにやっていた訳ではなく(笑)、5年前から2年前まで、厚労省の医療安全推進室というところで医療事故の原因究明とか再発防止

の仕事をして頂きまして、その時に清水先生といろいろおつきあいをさせて頂くことができました。

ただ、正直、僕は清水先生とじっくり話したことはありません。会ったことは何度もあるんですけど、いつも「しっかりやれよ」とか、「最近、仕事が進んでないな」とかですね、「ま、国には期待してないけどな、がんばれよ」とか、そういうことを言われていました。それでも、直接的・間接的に先生の言動を通じていろいろ教わったな、と改めて思っておりまして、3つぐらい、今感じていることをお話したいと思います。

1点目は、医療者も行政もそうですが、「患者さんと家族の思いや声をよく知ること」がとても重要なんだろうなと思います。これはすでに皆さんがたくさん話されていることですが、医療者の声は常に大きくてよく響くし、論理的で理路整然としているように見えます。一方で、患者さんや家族の声は小さくて、感情に満ち溢れていて、どこにエッセンスがあるのかと一生懸命に聞かないとなかなか分からないこともあります。それでも、そういう人たちの声を、医療者も行政もよく聞いていかなきゃいけないと今は思っています。

とくに清水先生が「発掘」された、と言っているかと思いますが、豊田さんを通じて、僕は本当にたくさんのお話を教えて頂きました。ああ、患者さんというのはこういうふうに感じているのかな、とか、こういう場面ではこんなふうを感じるのかなということをお話してたくさん教えてもらって、仕事をやるうえでとても有意義でした。

永井さんからは剛速球が飛んできます。剛速球で患者さんから言われるとググッと胸に突き刺さることもありますが、豊田さんのようにソフトに言ってくると、「うーん、そうかな」と。硬軟織り交ぜて攻め込まれるとなかなかつらいのですが、そうだなと思うことがたくさんありました。

それから、2つ目は、「医療者が医療者にうそをつかないこと」が大切なのかな、と思っています。清水先生は医療裁判の証人になったり意見書を書くことを通じて、医療界の権威の人たちとたくさん議論をされてきた。それを僕は横で見させて頂いておりました。科学的な議論の是非はちょっとよく分からないんですが、同僚や権威のある医師に対して沈黙しない、ということがとても重要だと思います。沈黙されるお医者さんが多いと思いますけれども、沈黙は時に、うそに等しいような効果がありますよね。

沈黙しないとか、主張すべきことはちゃんとと言うとか、ダメなものはダメと言うという、そういう文化を創られてきた先駆者の1人が清水先生だと思っていますし、医療者が医療者に対してもうそをつかないというのは、もっともっと必要なことなんじゃないかな、と感じています。

◆医療者も行政も、患者第1主義で仕事をする◆

最後にもう1つは、英語で言う「Patient First (ペイシェント・ファースト)」。患者のために仕事をするという、これは今日もたくさん言われましたし、当たり前のことですが、それが今の医療界とか我々の行政の中で十分、実行できているかという、自分の胸に手をあててもどうかな、と思う時があります。

仕事をしていると、これは医療従事者のためにやっているのか、病院のためにやっているのか、社会保障制度のためにやっているのか、何のためにやっているのかよく分からなくなる、ということが時々あります。でも、常に患者さんのために、ということの基本をやっつけていかなきゃいけないんじゃないかな、と思います。

清水先生はまさにそういうことを実行されていたんじゃないかな、と思います。確固たる信念の下で先生がやってこられたことに大きな敬意を覚えますし、我々、行政も日々の思考の中で、患者さんを第1に考えてやっていかなきゃいけないなと感じています。

「清水先生の思いを未来に生かす」というこのセッションのタイトル通り、自分が感じている3点をお話させて頂いて、未来に向かって仕事をしていきたいという決意表明といたしまして、終わりたいと思います。ありがとうございました。

大熊由紀子さん

佐原のヤスちゃんは、他人事のように「お医者さんが」とか言っておられました、ああ見えても実はお医者さんであります(笑)。すごく穏便・穏健な目立たない医系技官というふうですが、これぞ本当の、真の改革者だなあと改めて尊敬しました。

それでは次に、清水先生がご出身の東京医科大学で医療安全のための演説をして駆けつけてこられた弁護士さんに、お願いいたします。

鈴木利廣さん(弁護士)

◆この日は奇しくも、清水先生の原点である東京医大のメモリアルデー◆

鈴木利廣といいます。今日は、東京医科大学病院の心臓手術の事故で亡くなられた方々の命を大事にするということで、医療安全を誓う7回目のメモリアルデーの特別講演がありました。その原因になった事件の当事者の

川田綾子さんが今日もお見えになっていますけれども、私はその代理人をさせて頂いたことから講師として招かれ、1時間ほど話をしてきました。

話し始めるまで迷ったんですけれども、清水陽一の話をしてしまいました。つまり、彼が学生のときに東京医大病院で起きた医療事故をきっかけに、医療安全を考えるようになったという話をしました。今日は、仏教的には清水陽一の四十九日なんですね。そういう日に東京医大で医療安全の講演をさせて頂くことになり、非常に緊張しながらお話をしてきました。

だいぶ前に古い名刺を調べましたら、榊原記念病院循環器内科の彼の名刺が出てきましたので、彼には80年代の半ばくらいまでにはお会いしていたんだろうと思います。お互いに非常に印象の薄い青年だったらしく、お互いにその頃会っていたことを知りませんでした。この16～17年間、医療問題弁護団に関わって頂いて、彼は同志だったなというふうに思います。

それで、清水陽一がやってきたことを未来に活かしていくために、彼がやってきたことを振り返ってみたいと思います。今日のプログラムのインタビュー記事にも載っていますけれども、1つは、医療事故について循環器内科医としての専門家の意見を、裁判事案を通じてきちんと表明してきたというのがあります。

2つめには、自らの医療現場での医療事故に、誠実に対応してきたことがあると思います。そして、現場を変革してきたということですね。

3つめは、そういうものを超えて、「架け橋」とか「医療の良心を守る市民の会」といったところに参画して、副代表として市民運動を一緒に展開してきたんですね。

◆清水先生の活動を集団として引き継ぎ、展開していくべき◆

そういうことを通じて、「うそをつかない医療」という言葉に象徴されていますけれども、彼は安全・誠実・信頼の医療をつくらうとしてきたんだろうというふうに思います。ですから、彼がかなり孤軍奮闘的にやってきたと思うんですけど、安全・誠実な医療を目指して行動してきたことを、これからはどうやって集団で、みんなで展開していくのかということが、我々が引き継ぐべきことではないかと思います。

彼には、「医療事故から学ぶ」という視点があります。最初はたぶん、専門職責任の視点から考え始めたのだらうと思います。専門家は自らのフィールドの中で起きたことに、専門家として社会とクライアントに責任を持つという考え方が、専門職能集団としての専門職責任であります。

そこから段々と、自らの病院などさまざまな医療事故被害者であったり、よい医療を展開するために活動している市民の人たちとのヒューマン・コミュニケーション、人間関係のあるべき姿を追求してきたのではないかと思います。

その1つの視点が「事故から学ぶ」ということであります。今、事故から学ばない医療が一部で叫ばれているように思います。「人は誰でも過つもの、しかし患者に害なすなかれ」という考え方に、システムを変えることによって繋げなければいけないのですが、現在の医療界の一部では、「医療者を法的責任から解放せよ。そのために医師法21条を改正せよ。そうすれば医療事故調はつくってもよい」と、こんな議論がまかり通っているわけです。

まずは率直に事故から学ぶために、何が必要なのか、どうすべきなのかということを清水陽一は展開してきたように思います。

◆患者から学び、対等な信頼関係を築く◆

そして2つめには、「患者から学ぶ」という視点があります。誠実に対応し、そこから信頼を構築していく医療をつくるんだ、ということだらうと思います。対等な信頼関係を築くにはどうしたらいいかを模索してきたと思います。だとすると、そういった安心・誠実・信頼の医療を目指す全ての人々と、いわば、えにしを紡ぎ、さまざまな架け橋をつくらうじゃないかということなのではないかと。

今までは、個別にやっていることを「すごいね。なかなか真似できないよね」とみんなが言ってきましたけれども、1人でやる仕事ではないのだと思います。清水さんの先駆性にきちんと寄り添いながら、みんなでこの考え方を展開していこうと、その出発点に今日もなればいいと思いますし、私ももう少しがんばってみたいと思います。

若いころは、「未来を生きていないことがはっきりしているじいさんたちが未来を語るなよ」と思ってきたんですけれども、自分がその歳になってしまって未来を語る資格があるのか非常に疑問なんですけれども、ちょっと未来を語ってしまいました。

大熊由紀子さん

ありがとうございました。「えにし」のホームページ～「ゆきえにし」というキーワードで検索して頂くと先頭に出てきますが、そこに「医療事故から学ぶ部屋」という部屋があります。その冒頭に出てくる勝村ヒサちゃんでございます。よろしくどうぞ。

勝村久司さん（医療情報の公開・開示を求める市民の会事務局長）

◆正義感とユーモアを持って、息の長い活動を◆

勝村です。僕は大阪で高校の教員をしてまして、医療とは直接関係ない。弁護士さんでもジャーナリストでもありません。だからこそ、普通の感覚でもって、本当に価値が高いものはすごく価値が高いと、きっちり評価するのが僕らの役割であると思っています。つまり、清水さんのような人は一番価値が高いんだということを、やっぱりちゃんと言っとかなきゃいけない。

自分のほうが偉いと思っているお医者さんが他にもたくさんいるかもしれませんが、それは違うと。清水さんの方が価値が高いということを、普通の市民の立場からはっきり言っておきたいと思ってきました。

高校で教員をしていると、子どもたちにどういことを教えるべきか、と思うわけですが、僕は理科の教員なので、「科学的な思考力」とか言いながら、論理が健全じゃないとだめですよ、とか、情報収集をする際にもいろいろと偏見を持ってはだめですよ、しっかり情報を収集しなければいけないよ、と言っています。そして何かおかしいと思ったら、ちゃんと勇気をもって、正義感をもって言動しなきゃいけないんですよ、と。それも、熱くなりすぎたり、固くなりすぎると長続きしないから、常に何をやるにしてもユーモアで明るくやっ

ていかなきゃいけないんですよ、みたいなことを言っています。そういうなかなか誰もできないことを見事にしてくれているのが、清水さんだったわけです。それはものすごく価値が高いということを、僕は言っておきたいと思っているわけです。

◆「うそをつかない。僕はこれ以外には何も求めない」◆

とくに、「うそをつかない医療」の「うそをつかない」、僕はこれ以外には何も求めない、これだけでいいと本当に思っています。

学校でもいろいろな問題が起きて、子どもを呼んで話を聞かなきゃいけないことがあります。そんなときに、僕は「本当のことを全部話してくれたらそれでいいんだ」ということを言うし、本当のことを全部話してくれたら、「じゃあ後はどうしたらいいか自分で考えて」と言えば、本当にすべては解決していくわけです。

僕は自分の1人目の子どもを21年前に亡くして、それで医療裁判や市民運動などいろいろしてきました。その中で、夜な夜な、僕は何を本当に求めている、僕がやっていることにどんな意味があるんだろうとか、自分なりに頭を整理しないとかなかなかできないのでいろいろ考えてきたわけですが、そこで行きついたのは「うそをつかない」ということだけだと思いました。

それ以降、自分の子どもにも「もうお父さんは何をやっても怒らない」と、「ただうそだけはついたら怒る」ということだけ言って、なんでもかんでも正直に、そんなことまでやったのかということまでも全部言うようになるようになりました。「お父さん、言ったらいいってゆうから」という感じで言うわけです。

でも本当のことを言っているうちは、ちょっと安心できる、信頼できる。次が生まれる。僕はそれだけだと思っているわけです。

先ほど、医療過誤原告の会がもうすぐ20周年だとお話されていましたが、21年前に僕が事故にあった頃、そして原告の会ができた頃は、事故について何も分かりませんでした。本当の病名は言ってなかったし、使った薬名もまったく本当のことは言ってなかった。カルテやレセプトも絶対に見ることができませんでした。子どもが死のうが何があるうが、もう何も分からない。

事情を尋ねると、本当は妻は非常に強い陣痛で苦しんでいたのに、「陣痛が弱くてニヤニヤ笑っていた」と、「スタッフたちは皆そういうふう記憶している」と、妻からしたら驚くようなことを言われました。「本当のことを知りたかったら裁判をすればいいのよ」という話まで出てくる。

◆カルテの改竄(かいざん)がなければ、裁判にはなっていない◆

僕は「すべての医療裁判は、カルテの改竄との闘いにすぎない」と実感してきたし、間違いないと思っているわけです。そうすると、まるですべての医療者が改竄しているみたいじゃないかと言ってくる人がいますけど、そんなことは言っていない。「すべての医療裁判は、カルテの改竄との闘いにすぎない」という言葉の意味は、改竄をしていないところは裁判になっ

てない、ということなんです。そのことは、今日紹介された清水さんの言葉の中でも表現してくれているし、清水さんはやっぱりいろいろな

